

【実践研究論文】

中学校における俳句の読みと創作

Reading and Composition of a Haiku in Junior High School

桃原千英子 (沖縄国際大学)
Chieko TOUBARU

松本 修 (玉川大学教職大学院)
Osamu MATSUMOTO

要 旨

俳句の授業では、知識優先の指導が俳句の芸術性の理解を阻んでいる状況がある。それを改善する学習デザインには、次の4点が必要である。①探究的な課題を出発点に、学習者が教材の伝統的な言語文化としての価値を見いだす学習過程を作る。②個々が見いだした価値を共有するためのコミュニケーション的な学習を作る。③探究的な課題につながる教材の価値を掘り起こすための教材研究を深める。④「二句一章」の条件を加えた改作のプロセスを加える。

学習材として、漱石の「柿の葉や一つ一つに月の影」と、授業者の俳句を用いて、このような条件を備えた学習プランを作った。通常行われているような詳しい解説を行わず、この4点に対応した活動を行った。主な活動は、二つの句を比較し、良いと思った句の理由を書いて発表しあう。切れ字を使って、作成した自分の作品を改作する。俳句の良さについて自分の考えをまとめることである。

結果を分析すると次のことがわかった。①学習内容においても、学習者が教材の伝統的な価値を見いだしていくプロセスは確認できた。②個々の学習者が見いだした伝統的な言語文化としての価値を共有するためのコミュニケーション的な学習となり得ることも確認できた。

今後は、対象の学習者の特性に合わせて、俳句の学習の導入としてこのような学習を行い、鑑賞の学習につなげていく展開を考えていきたい。

0 はじめに

石塚 (2013) は、切れ字を用いて二句一章の句を高校生に創作させる指導を試み、俳句指導において、安易な創作や、季語などについての単なる知識の刷り込みが行われてきた状況から脱し、俳句の文芸としての特性を理解させる学習を構築することの可能性について次のように述べている。

俳句の創作指導では、五七五の定型に次いで「季語」よりも先に「切字 (切れ)」を指導し、「切れ字」を使い「切れ」を持った「二句一章」仕立ての俳句をまずは創作できるようにする指導が優先されるべきである¹。

1 石塚修 (2013) 「切れ」からはじめる俳句の創作指導『人文科教育研究』40 人文科教育学会 2013.8 pp.41-48 引用はp.44

これは、俳句についての知識優先の指導が俳句の芸術性の理解を阻んでいる状況を改善するための一つの具体的な提言である。

また、松本・井上 (2011)²は、小学校3年生を対象にした俳句の創作指導において、すでに俳句に関する「知識」が俳句の本質の理解を妨げ、創作活動が学習指導として伝統的な言語文化の価値の理解に結びつかない可能性があることを示し、その改善の方向性を探っている。松本 (2012)³は、それを学習デザインの条件として、以下の三項目に整理し、狂言を教材とした探究的な課題のもとでの言語活動のデザインを示している。

- ① 探究的な課題を出発点に、学習者が教材の伝統的な言語文化としての価値を見いだす学習過程を作ること。
- ② 個々の学習者が見いだした伝統的な言語文化としての価値を共有するためのコミュニケーション的な学習を作ること。
- ③ 探究的な課題につながる教材の価値を掘り起こすための教材研究を深めること。

ここでは、一連の研究をふまえて、中学校1年生を対象として、創作を含む俳句の学習をデザインし、その可能性を検討する。具体的には、松本・井上 (2011) を踏まえた学習過程に、「二句一章」の条件を加えた改作のプロセスを加えて、学習をデザインし、その学習の様相を分析・検討する。

1 学習デザインの概略

第1時 (予備学習)

- 1) 俳句について知っていることをいくつか挙げ、俳句についての既存の知識を呼び出す。
- 2) 俳句を作ってみる。(月の句か自由題、両方でも可)

第2時

- 1) 二つの句を比較し、どちらの句が良いか考え、その理由を説明する。

A 柿の葉や一つ一つに月の影 (漱石)

B 柿の葉はどれもつやつや月光る (修)

* 音読をゆっくり2回繰り返す。それからどちらの句が良いか考え、理由を記入する。

- 2) 4人程度のグループでそれぞれの考えを述べ合い、どこが違い、どこが同じか、互いの考えについてどう思うか、話し合う。

* 交流用の学習シートを用意し、それぞれの考えと、交流した意見を簡単に記録できるようにする。

2 松本修・井上幸信 (2011) 「伝統的な言語文化の学習を成立させる条件」『臨床教科教育学会誌』第11巻第2号 臨床教科教育学会 2011.10 pp.81-87

3 松本修 (2012) 「古典に親しむことを目標にした狂言の授業」『Groupe Bricolage紀要』No.30 pp.22-31 引用はp.22

にする。

3) グループの話し合いのようすを代表者が発表する。

*重要な点を板書でまとめる。(想定されるのは次のような意見)

・「つやつや」「月光る」と直截に情景を表現するのではなく、情景を想像させる描写にとどめていているところ。

・「や」という切れ字によって、読み手に表現の解釈をゆだねているところ。

4) 「切れ字」を確認し、切れ字を使って第1時での作品を改作する。

5) 俳句の「良さ」について自分の考えをまとめる。

第3時

1) 作品を発表し合い、自分の好きな作品を選んでその理由を考える。

* どういう点が優れているのかを考え、書く。

学習材として、漱石の「柿の葉や一つ一つに月の影」を選んだ。切れ字が初五に用いられており、柿の葉と月の影との取り合わせによる作品であること。中学1年生にも語彙的な負担のないことが理由である。

授業実践は、2013年9月12日(木)、9月13日(金)、9月20日(金)に、那覇市立〇中学校1年1組(35名)で行った。第1時と第3時を当時担任の桃原が実施し、第2時を松本が実施した。

データとしては、資料に掲げる学習シートのコピーの他、二句を比較した最初の話し合いについてのグループの話し合いをICレコーダで録音し、一部をトランスクリプトして作成したプロトコルを使用した。

2 俳句についての既知の知識

第1時の「俳句について知っていることをいくつか挙げてみよう」の欄に書かれていた内容は、以下の表1の通りである。(重なりあり。クラスは35名)

表1 俳句の既知知識

分類	生徒の記述	人数	備考
音数律に関すること	五七五で表現する	26	
知識に関すること	季語を使う	1	
表現内容に関すること	気持ちを表現する	5	
	感じたことをそのまま表現する	2	
	風景・景色を表現する	4	
	いろいろな表現ができる	1	
その他	江戸時代ごろ流行った	1	
	トモゾウがよく使う	1	
	松尾芭蕉が有名	1	
	銀行員等朝より蛍光す鳥賊のごとく	1	(金子兜太の句がそのまま書かれている)

五七五という音数律について挙げた者が26名、季語という知識について挙げた者が1名、表現の内容について挙げた者が12名、その他が4名であり、その他を含めても音数律以外の季語や切れ字に関する単なる知識を挙げた者が少ない。俳句についてのいわば余計な知識はあまりない状況である。そういう意味では、俳句の読みと創作にあたって、無垢な状態で臨める状況であるとは言える。

実際に創作した俳句について、「月の句」は自動的に季語が含まれるので、自由題のものを見ると、19句(一人で数句創作したものを含む)の作のうち、季語を含まないのはわずか2例であった(「スポーツは〇〇〇〇(生徒自身の名前)うますぎる」「スポーツは失敗してからうまくなる」)。ここから見ると、俳句には季語が入るものであることは大方既有的知識となっていたことがわかる。俳句に関しては音数律と季語という知識は中学1年生にとって既有的のものとみられる。

一方、「気持ちを表現する」5名、「感じたことをそのまま表現する」2名、「風景・景色を表現する」4名という結果を見ると、「気持ち」と「風景」に分かれているものの、表現すべき主題を持った文芸形式であることがある程度意識されている。「感じたことをそのまま」というのは近代俳句における写生の強調が小学校段階で教えられている可能性を示しており、石塚(2013)にも指摘されている通りである。ただし、「気持ち」を挙げる学習者の創作が実際に「気持ちを表現」したものになっているかという点、そういう対応関係は見られない。「風景」についても同じである。この表現内容も、客観写生に関連する断片的な知識として入っている可能性がある。

3 二つの俳句の比較

漱石の俳句と作例との比較から、俳句の表現の本質についてどのような理解があるかについて検討する。比較したのは次の二つの俳句である。

- A 柿の葉や一つ一つに月の影
- B 柿の葉はどれもつやつや月光る

学習者の反応例は次のようであった。

Aの方がよい 26名

- ・Aの方が情景が頭に浮かぶ。また、柿の葉「や」と、「は」ではなくて「や」でかいているためカッコいい感じがする。いかにも月が主役って感じ。
- ・Aは「柿の葉や」といっていてBは「柿の葉は」となっていて、Aには、「や」という切れ字を使っているからです。切れ字を使うこと余情を感じさせることができるから。
- ・「柿の葉は」ではなくて「柿の葉や」になっているから。
- ・「柿の葉や」は言い切っているけど「柿の葉は」は、まだ続きそうな感じがしているから。

- ・柿の葉という書き出しは同じなのに、Bの句の「は」は現代的な感じがあるけど、「や」にするだけで柿の葉に歴史を感じたから。
- ・「一つ一つに月の影」という表現がいいと思う。「柿の葉は」じゃなくてやになっている所もすごい！その場面が想像出来るのもいいと思う。
- ・言葉づかいが古くてかっこいいと思ったから。また、「月の影」と「月光る」では、「月の影」の方が、興味を引かれて、どんな景色か想像するのが楽しくなるから。
- ・Bの場合は「どれもつやつや……」と書いているが、Aは「一つ一つ」と書いてある。「一つ一つ」の方が俳句に向けた表現だと思う。
- ・月の影という言葉は月の光という意味で月の光は一枚一枚を写していると思うから。
- ・Aの方が俳句という感じがして、Bはつやつやといういい方がやだ。

Bの方がよい 8名

- ・Aは、一つ一つに月の「影」だけど、Bはどれもつやつや月「光る」だから月の影より、月光るのほうが見ていていいし、影よりは光のほうがいいように見える。
- ・「つやつや」というひょうげんがカワイイから。
- ・「つやつや」という言葉を使って表しているのでイメージが浮かびやすい。

予想したように、「や」という切れ字に何らかの形で言及した者があり、「言葉づかいが古い」も含めると7例ある。感覚的に「格好いい」というようないい方もされているが、俳句らしい表現であると捉えているものと推測できるし、「いかにも月が主役って感じ」「言い切っている」「余情を感じさせる」などは、切れ字の機能に具体的に言及しているものと考えられる。(ただし、発表時に「余情」を「よくじょう」と読んでおり、断片的な知識である可能性も高い。)

グループの話し合いのプロトコルデータを見ると、話し合い活動になれていないというこの学習集団の特徴もあって、具体的に互いの読みを再検討するような交流には至っていない。しかし、「俳句の「良さ」とは？」の記述には次のようなものがみられる。

- a 人によって表現が違い、いろんな想像ができるところ。
- b 一つの俳句の中に深い意味がある。
- c 切れ字などを使う事で昔の言葉づかいなどに変化させることができる所。

aは、他のメンバーの発表を聞いて、読みの違いに全体的に言及したものと推定できる。bは、他のメンバーの「切れ字を使っていて余情を感じられる。」(当人のメモ)という発表を受けての表現と推定できる。またcは、他のメンバーの「漢字が多く(注「一つ一つ」「影」を指すものと思われる)

昔みたいな感じがする」という発表を受けての表現と推定できる。これらは当人の既有知識、自作の句や自分の読みそのものには見られない要素であり、いずれも交流における他者の読みが、俳句の「良さ」の表現に影響を及ぼした可能性がある。

このように二つの俳句の比較において、切れ字の機能や俳句の表現の本質に迫る理解が促進され、交流によってもその理解がさらに促進される可能性を確認することができる。

4 切れ字を用いた改作

切れ字を用いた俳句改作について検討する。授業では、二句の比較において、「や」という切れ字がクローズアップされたことを受けて、全体に対し、「切れ字というものは「や」「かな」「けり」「か」「ぞ」等を指し、いろいろな役割を持っているが、読み手に解釈を促す効果を持ち、俳句の重要な表現の特徴である。」という趣旨の説明を行っている。

実際になされた俳句の改作の様相を下の表2に示す。

表2 俳句改作の実際

改 作 前	改 作 後
月明かりぼくの心が落ちてくぞ 土曜日はまるで天国あそべるぞ	月明かりみんなの心おちつくぞ 土曜日だやっぱりあそぶたのしけり
静かな夜夜空にはえたまるい月	秋の夜ぞ全てを照らすやまるい月
人の影月に照らされ写りだす	人影や月に照らされあらわれる
お月様私の事をてらしてる まっ赤だな赤いめがねの赤とんぼ	お月様私の事ぞてらすけり まっ赤かな赤いめがねぞ赤とんぼ
十五夜まいとしあるよたのしいよ スポーツは○○○○うますぎる	おつきみや毎年見ても楽しいぞ 改作せず
夜の天にうさぎがもちつく秋の月	夜の兎がもちつきおるや天の地ぞ
十五夜観賞してきれいだな	おつきみや何度見てもきれいだな
虫たちの鳴き声ひびく秋の夜	十五夜や月が輝き虫が鳴く
食の秋ぱくぱく食べよう残さずに	食の秋食欲ありけりおかわりも
秋もみじ風秋めく紅葉狩	秋空や夕暮れ空に赤とんぼ
秋秋の夜は月夜で美しい	仲秋や月夜になりて空を見る
食の秋たくさん食べると太ります	改作せず
紅葉の葉秋をいろどるあざやかに	紅葉の葉秋いろどるあざやかぞ
池の中月はきれいだお月見さ きれいだな家族でたのしおつきみさ	月光り池は光りてつきとうる おつきみだお花がちるや月の日に
流れ星秋の夜をとびまわる	星たちや秋の夜空をとびまわる
満月のかがやくきいろがすてきだね	満月やかがやくきいろぞすてきかな
月きれいキラキラひかる夜の空	月きれいキラキラひかる夜空かな
まん月の日だんごをたべるおいしいね	まん月の夜団子食べるおいしけり
月の中うさぎがおどるお祭りだ	月の中うさぎがおどるお祭りや
見上げると赤黄オレンジ秋の色	改作せず

改 作 前	改 作 後
秋の夜にかがやき放つ月と影	秋の夜やかかがやき放つ月と影
なし	満月の夜や流れ星とかがやいている
満月やうさぎのもちつき夜を照らす	改作せず
月明り虫のねきこえる夜の空	満月やあの人思ぞさみしけり
年越だ行年早くすぎてゆく	食の秋たらふく食べたら太るかな
十五夜とともににはじまる冬支度	虫の音や冬の準備の鳴き声だ
お月見をうさぎが見つめるだんごずき	お月見やうさぎがみつめるだんごずき
空高く夜空に浮かぶあきの月	空高けり夜空に浮かぶあきの月
秋の夜とってもきれいなお月様	秋の夜明るくひかるやお月様
虫が鳴く落ち葉が落ちたらもう秋だ	食の秋食よくありけりおかわりも
星月夜それと共に お月様	星月夜それに負けじとお月様
夜の空月の明かりがぼっと照らす	夜の空月の明かりが照すかな

切れ字についての説明が簡略であり、文法的な説明を一切行っていないこともあって、誤用や勘違いもあるが、「人の影月に照らされ写りだす→人影や月に照らされあらわれる」「秋秋の夜は月夜で美しい→仲秋や月夜になりて空を見る」「十五夜とともににはじまる冬支度→虫の音や冬の準備の鳴き声だ」「秋の夜とってもきれいなお月様→秋の夜明るくひかるやお月様」「夜の空月の明かりがぼっと照らす→夜の空月の明かりが照すかな」などはそれなりに切れ字の表現効果を示す改作と言えよう。多くの切れ字を用いた作品を読んだり、いくつもの比較検討を重ねれば、言葉で説明しなくてももっと俳句らしい表現に近づくことができるだろう。俳句らしい創作が出来るということは、俳句の文芸としての本質に近づいたということを示すものと考えていい。

ただし、ここでは季重なりを忌むことについての指導は行っていない。学習者の創作では季重なりはあまりにもしばしば現れる。これを禁じると、かえって創作が出来なくなってしまう可能性があるため、今回はあえて触れなかった。このことは、石塚（2013）も「今後の課題」としているが、小中学生の段階では、少なくとも創作の最初の段階ではやむを得ないものとする。

この切れ字を入れた改作のあと、互いの句を発表し合い、「誰のが良いか、それはなぜか」を書かせている。その記述を見ると、切れ字が良い点であるとしている記述が11例あり、言語表現に着目した理由付け、情景が浮かぶという理由付けも目立つ。次のような記述である。

- ・かがやき放つの「放つ」という表現がいいと思う。その風景が思い浮かぶ。
- ・切れ字の「や」「けり」を使っていて満月の中に自分の大切な人の顔が写っているようなイメージをそうぞうさせるから。
- ・「や」の使い方もいいと思うし、星たちが夜空をとびまわるという表現がいいと思った。

第3時の「俳句の良さって何だろう？」の記入は、第2時の繰り返しの課題であるが、そこにも切れ字に言及した記述が11例見られ、次のような記述がある。

言葉だけで世界がつくられ、その言葉1つ違うだけでその世界も違ってくる所。

切れ字を使った句がとてもいんしょうに残る。

切れ字を使うと、昔っぽくできる。

切れ字を少し使うだけでも、俳句らしさが出てすごい。

切れ字を使うことでより俳句らしさが出る所。

切れ字を使えば俳句がもっとよくなること。

切れ字のある句と無い句の比較、切れ字を用いた改作、改作した句の交流を経て、学習者が俳句の本質に近づくことが確認できた。

5 コミュニカティブな学習

1 回目の話し合いにおける1つの班のプロトコルが以下のようなものである。

A班 N (男子) T (女子) U (男子) K (女子) M (授業者)

1 N：じゃあ俺から言うよ。

2 T：お願いしまーす。

3 N：えっと、私はBの句が良いと思う。なぜなら、Aは一つ一つに月の影だけど、Bは、どれも、つやつや月光るだから、月の、月の影より月光るの方が見ていていいし、影よりは光の方がいいように見えるから。

4 U：お／／っ。いいよお。

5 T・K：／／おっ

6 T：何番？なんね？

7 N：B。

8 T：みして？

9 K：なんかきらーんと。なんかにやにやしなながらそれ見てるけど、それあんま気に＝

10 T：＝じゃあいくね。

11 K：どうぞ。

12 T：えー、ちょっと失礼だけど、／／私は((笑い))／／Aの方がいいと思います。なぜなら、Aの方が／／目に浮かぶ気がするし、また、柿の葉「や」と、「は」ではなくて「や」で書

いているためかっこいい感じがしました。いかにも月が主役って感じがします。

13K：／／えー

14U：／／（笑い）

15U：／／だめ、待って、Nの書いてない。

16N：Uいこう。（3）あれ、U、終わった？

17T：U。

18U：ごめん。

19K：何だっけ、U、まさだった？

20U：え、おい、書いてねえんだよ。

21T：はい。影より光の方がいい感じする。

22U：月が主役ね。

23T：光の方がいい感じがする。

24U：月が、主役。

25K：これさわっちゃいけないんですよね？＝

26N：＝これって録音してるんですか？

27M：うーん、そうかもしれないね。

28N：謎だ。

29M：気にしないでしゃべって。

30K：はい。

31M：急にまじめになんないで。

32K：あはは。

（5）

33U：ちょっちょっちょっ

34T：だから影より光の方がいいって。

35T：影より光。光の方が。

36M：（（全体に））あー。あの、Aの句の影っていうのはね、こういうときは光のことを言ってるの。

37K：／／ええ？

38T：／／（笑い）

39M：月影さやかになっていういい方が＝

40K：＝どっちでもいいよどっちでもいいよ／／どっちでも光光なっているからどっちでも。

41U：／／どっちでもいい

42T：（（笑い））

43N：おねえさん通訳。

44T：OK?できた?

45U：うーん。

46T：どうぞ、どうぞ、Uどうぞ。

47T：はやく読んで。

48U：えどうぞって、(不明) っていうことかと。

49T：違う。

50U：違う。

51N：発表。

52U：えー僕は、Aの句がよりよいと思います。なぜなら、一つ一つに、というところが、くわしく書かれていて、月の影というのも、面白かった、です。はい、どうぞ。

(3)

53K：(どっきりどっきり)

54T：((笑い)) 違うよ。

55N：これさ。これ質いいかな。なんかめっちゃきれいじゃん?いかにも新しいって感じが。

56K：びかびか。

57U：自分の意見を言わなけりゃはじまらねんだよ。おい。

58T：はい次。

59U：自分の意見を言わなけりゃすまないんだよ。

60T：はい。

61K：私は、Bの句の方が良いと思う。なぜなら、つやつやという表現がかわいいからです。

62T：あははは

63K：かっこ笑いだけど。

64N：おい名前//なんだ。

65U：//おわりーす。//おわりーす。

66K：//名前なんだってひどくね?

67N：漢字、やっぱいいやって思った。

68N：つやつやという表現が一

69K：美しいって書いてその次() 付くの。簡単だろ。

70K：表現がかわいいから。

71K：ひょうげんくらい漢字で書けば良かった。終わり?

72T：えー?

73K：終わり?

74T：終わり終わり。

75K：先生、終わりましたー。

交流の学習に慣れていないため、互いの発表に対して質問をしたり、違いを確かめたりというような突っ込んだやりとりにはなっていないが、形式的にもくだけた闊達なやりとりとなっており（連続発話25-26・39-40、同時発話12-15・40-41・64-66、自然な口語的表現）、話し合いを推進する機能を担った発話（例えば1・2・4・5・11・16-17・46-51・57-60）もあって、話し合いの推進をコミュニケーション的な形で行っていることは確認できる。64から71は名前の字、発表の内容、話し合いの終わりという3つの内容を同時に扱う会話となっており、話し合いそのものはきわめて闊達である。

すでに見たように、その後の「俳句の「良さ」とは？」という課題においても話し合いの内容が反映されている。自分の読みに対する十分な相対化は全体としてなされていないものの、他の人の読みへの意見を書き込む欄を設けたり、自分の意見の書き直しを学習過程に加えれば、よりメタレベルからの認知が可能になるであろうことが予想される。

6 結論

検証の結果、以下のことが明らかになった。

- ① 中学1年の段階では、音数律や季語を既有知識とし、俳句が表現すべき主題をもった文芸形式であることも意識されている。しかし、小学校や高校での実践同様、断片的な知識が、創作や伝統的な言語文化の価値の理解には結びついていない実態が見られた。
- ② 二句を比較し、良さを説明する探究的な課題により、切れ字の機能や俳句の表現の本質に迫る理解が促進された。
- ③ 「切れ字」のある句と無い句の比較、切れ字を用いた改作、改作した句の交流を経ることで、俳句の文芸としての本質に近づくことが確認できた。
- ④ 伝統的な言語文化としての価値を共有するためのコミュニケーション的な学習が生じた。他者の考えに触れる中で、俳句の本質の理解が促進される可能性が見いだせた。

7 おわりに

中学校1年生を対象として、探究的な課題を出発点に、学習者が教材の伝統的な言語文化としての価値を見いだす学習過程を作ること目標に、切れ字を用いた創作（改作）を含む俳句の学習をデザインし、授業データを検討してきた。

あまり慣れていない学習形態での授業であったため、明確で十分な成果とは言えないが、学習内容においても学習者が教材の伝統的な言語文化としての価値を見いだしていくプロセスは確認できた。また、個々の学習者が見いだした伝統的な言語文化としての価値を共有するためのコミュニケーション的な学習となり得ることも確認できた。

今後は対象の学習者の特性に合わせてつ、俳句の学習の導入としてこのような学習を行い、鑑賞の学習につなげていく展開を考えていきたい。

(本研究は、石塚 (2013) 松本・井上 (2011) 松本 (2012) を基礎に、桃原・松本の協議の上に学習デザインを行い、両名によって授業実践・検討・執筆を行った試行的な授業デザイン研究である。)

資料 学習シートの内容

I 俳句の学習（予備学習）

① 俳句について知っていることをいくつか挙げてみよう。

--

② 俳句を作ってみよう

月の句

--

自由題

--

II 俳句の学習 1

① 次の二つの俳句を比べよう。表現に着目して、どちらの句が良いか、その理由を説明しよう。

A 柿の葉や一つ一つに月の影（漱石）

B 柿の葉はどれもつやつや月光る（修）

私は	の句がより良いと思う。なぜなら、
----	------------------

② グループで互いの考えを交流しよう。

理由	さんの句	理由	さんの句	理由	さんの句

③ 俳句の「良さ」とは？

Ⅲ 俳句の学習 2

切れ字

や かな けり か ぞ 等

① 切れ字を使って俳句を作ってみよう

課題句 月

自由句

② みんなの句

さんの句	さんの句	さんの句
------	------	------

誰のが良いか、それはなぜか。

理由	さんの句
----	------

③ 俳句の良さって何だろう？

Reading and Composition of a Haiku in Junior High School

Chieko TOUBARU
Osamu MATSUMOTO

Abstract

Haiku lessons in junior school are, more often than not, criticized as being highly knowledge-oriented that could prevent students from appreciating its artistic aspect. In order to improve haiku lessons in junior high school, therefore, the author designed a lesson based on the following four points: 1) to create an effective material, by adapting one of Soseki's works, which offers meaningful tasks, 2) to create the process in which students find linguistic values in the material, 3) to provide the opportunity in which students exchange the values they find in the material, 4) to provide the process that help students create their own haikus.

This paper first describes the lesson the author conducted, applying the four points above. In the class, at least two accomplishments were observed: 1) students were able to find the linguistic values in the material, 2) students were able to share the values they found in the material through discussion. Based on the analysis of the class, the paper then discusses the effects of the lesson and proposes some tips to improve haiku lessons in junior high school.